



29 地震・津波等防災に関する留意点について教えてください。



1 地震に対する基本行動

(1) 基本行動の4つのポイント

- ①地震観測情報の発表段階で速やかに現場指導者へ連絡し、次段階への対応体制を整えておきます。
- ②地震注意情報^(注1)発表時点で一切の行動を中止し、速やかに避難を開始します。
退避前後、行動中に点呼（人数確認）を忘れずに行ってください。
- ③安全を第一にして、第一次避難地へ移動し、状況に応じて広域避難地へ移動をします。
- ④避難先は体験場所に近く、地震による土砂崩れや津波による被害がない高い場所を選定します。予め、実地踏査を行い、移動時間や距離、人数に適した広さが確保されているかなどを確認しておきます。
協議会では、子どもたちを保護者へ引き渡すまでの間、生命の安全を第一責任と捉え行動しなければなりません。

(注1) ここでは、東海地震を例にしていますが、気象庁が発表する「東海地震に関連する情報」では、観測された現象が東海地震の前兆現象である可能性が高まった場合に「東海地震注意情報」が発表されます。東海地震が発生するおそれがあると認められ、内閣総理大臣から「警戒宣言」が発せられた場合には「東海地震予知情報」が発表されることになっています（気象庁ウェブサイト「東海地震について」参照）。

(2) 身近な対応・対策のポイント

そのほか、次の点に留意してください。

【地震への対応・対策ポイント】

- ・火をすぐに消すこと。仏壇のろうそく・線香も消してください。
- ・ストーブ、ヒーター等も消し、避難するときは分電盤の主ブレーカーを切ってください。日ごろから分電盤がある場所、切り方を確認しておきましょう。
- ・防災グッズ（ヘルメット、懐中電灯、ラジオ、電池、携帯の充電器具、筆記用具等）、下着等衣類、非常食の完備をしておきましょう。
- ・子どもの寝室に倒れる可能性がある家具は置かないようにしましょう。
- ・倒れやすい家具は日頃から補強しておきましょう。
(家具転倒防止器具は正しい方法で用いないと効果がありません)
→倒壊した家具で逃げ道をふさぐことがないかを確認しておきましょう。

- ・ ガラスには飛散防止シートを貼っておきましょう。
- ・ 収納から食器等が飛び出さないように、収納扉が観音開きの場合には、耐震ラッチを付けておきましょう。
- ・ 収納・整理整頓は、重心を低く、奥に、揃えましょう。
例えば、本棚でいえば本を奥に揃えるだけで、本棚が倒れることを阻止する一定の効果があります。
- ・ 高いところに重い物を置かないようにしましょう。
- ・ 避難の際に割れたガラスの上を踏んでも良いように、就寝時には子どもの枕元に避難用の靴を置いておきましょう。
- ・ 家屋が2階建てであれば、なるべく子どもを2階に寝かせるようにしましょう。
- ・ 避難路として想定している途中に、割れる物や大型の障害物が置かれていないことを確認しておきましょう。
- ・ 建物の耐震補強については事前に地元行政へ確認・相談しておきましょう。

※警視庁ウェブサイト「地震のときはこうしよう」等参照してください。

2 津波への想定行動と避難時に注意すべきこと

～「地震だ、津波だ、すぐに避難！！」～

地震後は必ず津波が来ることを想定して行動します。津波注意報レベルでも避難を始めてください。津波到達時間は地域により異なりますので、行政等に確認しておきましょう。津波は1波、2波、3波と繰り返し襲ってきます。必ずしも1波が最大とは限りません。なお、陸上に遡上した津波は大人が全速力で走る以上の速さがあります。

地域で退避行動プランを考えておきましょう。地震発生後、速やかに避難行動ができるためには、避難場所の事前確認と、普段の訓練が必要です。

なお、「津波の前には必ず潮が引く」という情報は間違いです。平成5年（2003年）十勝沖地震による津波は、直前に潮が引くことなく大きな波が押し寄せました（気象庁ウェブサイト「津波について」）。

【津波への対応・対策ポイント】

- ・ 海の近くで揺れを感じたら、直ちに高いところに逃げてください。
- ・ 自分自身の安全確保を第一に考えてください。
誘導する指導者がケガをしては子どもたちを助けることは不可能です。
- ・ 真っ先に高台までの避難と、より高い所への二次的な避難を実施してください。
- ・ 堅い物（岩場や堤防など）からできるだけ離れます。岩やコンクリートへ叩きつけられて気絶、負傷して水死するケースを避けます。
- ・ 車で避難する場合の危険を日頃から考えて、退避手段を考えてください。過去の教訓では車は渋滞にはまり基本的には危険です。渋滞が予測される道や、車だと海岸線に近づく場合は、車は絶対に使用しないでください。
- ・ 津波は、繰り返し襲ってきます。第1波では終わりません。第1波よりも高い波が来ると思って、津波警報、注意報が解除されるまで、海には絶対に近付かないでください。

3 過去の震災から学んで対策を講じること

他の項目で述べている事故事例から学ぶという視点は震災であっても同じです。

東日本大震災（2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分）から学ぶことは当然ですが、それ以外の過去の震災、特に、地元周辺地区や地形等が類似する地区の震災を学ぶことが重要です。

【北海道南西沖地震】

1993 年（平成 5 年）7 月 12 日 22 時 17 分に発生した北海道南西沖地震を忘れてはならない。

マグニチュードは 7.8、奥尻では震度 6^(注1)、江差・小樽・寿都で震度 5。死者及び行方不明者の合計は 230 人にのぼった。

奥尻島には当時地震計が設置されていなかった（そのため、震度は推定である。）。奥尻地区では地震直後に崖崩れが発生し、ホテルなどが土砂により倒壊し、多数の宿泊客及び従業員などが死亡した。

津波の第 1 波は、震源に近い奥尻では地震発生後 3 分程度で来たと言われており^(注2)、奥尻島西部では第 1 波到達の 10 分後に最大波となる第 2 波が到達したといわれている。広い範囲に津波が押し寄せ、津波は約 30 メートル^(注3)に到達した（痕跡高）といわれている。10 年前の日本海中部地震（1983 年）では地震発生後 17 分後に奥尻島を津波が襲ったと言われており、そのときの経験により津波到達まで時間があると考えたのか、或いは車でないと高台に避難できないと考えたのか、車で避難した人達は（危険な避難ルートを選択してしまい、渋滞などが起きたようである。）車ごと津波に飲み込まれたようである^(注4)。

火災も発生し、広範囲に火が広がり、約 190 戸が焼損した。

つまり、この地震により、①土砂崩れ、②津波、③火災が起きて、多数の被害が出た。

この北海道南西沖地震を受けて、当時から、①実際には予想以上に高い津波が短時間に来ること、第一波以降の波がより高くなることもあること、津波は防波堤をも破壊すること、②地震計を設置すること、③地震保険に入ること、④火の始末、⑤車で避難することの危険性、⑥木造家屋の危険性、⑥低地に住むことの問題などが指摘された。

協議会は、東日本大震災だけでなく、それぞれの地元や周辺地区の過去の震災の歴史も紐解き、共通のポイントを理解した上で、「過去の教訓以上の震災が来る」という意識で対策を講じてください。

（注 1）北海道水産林務部漁港漁村課「北海道南西沖地震災害と復興の概要」等

（注 2）札幌管区気象台は地震発生 5 分後の 22 時 22 分に大津波警報を発表している。しかし、津波は 5 分ではなく、3 分程度で来たことを教訓として、現在、気象庁は津波警報の発令を地震発生から 3 分以内を目標にしている。

（注 3）気象庁ウェブサイト「津波について」

（注 4）防災システム研究所ウェブサイト

【地震や津波への対策確認ポイント】

- ☐ 体験場所や宿泊施設が津波や土砂崩れの被害が予想される地域ですか？
 - ・避難場所は（全員が避難できる広さや津波到達予測値以上の高さに立地する施設ですか）？
 - ・避難経路は（途中に崩壊する家や塀はありませんか）？
 - ・避難時間は（できる限り短時間で到着できる場所ですか）？
- ☐ 体験場所ごとに避難地と避難経路を明確にしていますか？
- ☐ 災害発生時における避難誘導担当者を発生時別に明確にしていますか？
 - ・体験中：体験指導者
 - ・バス移動中：バス運転手及び同乗教職員
 - ・宿泊施設：民宿責任者及び家族
- ☐ 宿泊施設チェックイン時に避難経路や避難場所を教えていますか？
- ☐ 夜間避難経路と避難誘導方法を決めて、実際に実施していますか？
- ☐ 宿泊施設で一時待機する避難部屋を決めていますか？
- ☐ 宿泊施設ごとに避難経路地図を作成し説明していますか？
- ☐ 宿泊施設での避難訓練を実施していますか？
- ☐ 行政や地域と連携した避難訓練を実施していますか？
- ☐ 火災防止策について検討していますか？
- ☐ 非常時の情報伝達方法、その周知内容は準備されていますか？
- ☐ 情報を得るテレビ、ラジオ、無線受信器などを備えていますか？
- ☐ 避難先が分散した場合の連絡手段と待ち合わせ場所を決めていますか？
- ☐ 電話の災害用伝言サービスの使い方と連絡手段を確認していますか？
- ☐ ツイッターやフェイスブックなどSNSを利用できますか？

※文部科学省が平成24年3月9日に発表した「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」も参考にしてください。

4 その他

地域の特性に応じて、地震、津波だけではなく、台風、土砂崩れ、噴火などの災害に対するチェックリストや対策マニュアルも地方自治体が作成済みのものを活用し、シミュレーション（模擬訓練）を定期的に行ってください。

特に、土砂崩れは、①道路が遮断されて帰ることができなくなり宿泊日数が増える場合、②農林漁家民宿が倒壊・浸水する危険がある場合の2点は必ず想定して準備をしてください。

[目次に戻る](#)

第6章 事故が起きた場合の対応方法の留意点について

第1節 救助体制、ファーストエイド・キット



30 救助体制の確立の仕方及びファーストエイド・キットについて教えてください。



1 確実な救急体制を築くには緊急時対応マニュアルの作成が必要

事故が発生したときに、慌てず冷静沈着に状況を確認して、そして的確な判断を下し、早急な応急処置を行い、関係機関への連絡等を誰もが確実に行うことができるよう「緊急時対応マニュアル」を作成しておきましょう。また、すぐに手にとって見るができるような場所に、貼り出しておきましょう。

受入れ前には、消防署や医療機関へ開催日や活動内容を伝えておくことで、いざというときにスムーズに対応をとってもらうことが可能です。休日・夜間救急診療機関や当直医等のリストを作成しておきましょう。

前日は、関係機関への連絡、救急車の進入道路や駐車位置に障害物が置かれていないか等、最終チェックします。学校側と指示体制等を確認しておきましょう。

2 ファーストエイド・キット

体験プログラム内容によって、フィールドへ持っていくファーストエイド・キットは必要最小限を用意します。不要なものは、重くなるだけでなく、いざというときに探すのに手間取ることにもなります。例えば、2時間のプログラムであれば、風邪薬などは必要ありません。取り出しやすいザックの上部にパッキングして、使用期限もチェックしておきましょう。

【基本的なファーストエイド・キットの内容】

☐ 消毒液（無色透明なタイプ）	☐ マウスピース（CPR用）
☐ 清浄綿	☐ 大きめなトゲ抜き
☐ 滅菌ガーゼ	☐ ポイズンリムーバー
☐ 三角巾	☐ 冷却ジェル
☐ 包帯（伸縮包帯も使いやすい）	☐ ペットボトルの水
☐ カットバン（大型タイプも）	☐ 安全ピン
☐ ハンドタオル	☐ テーピングテープ（サイズ各種）
☐ はさみ（医療用タイプがよい）	☐ 携帯用エアーギプス
☐ 油性ペン	☐ レジャーシート
☐ ビニール手袋（フィットするタイプ）	☐ 目薬（使い切りタイプ）
☐ エマージェンシーシート（アルミ箔の薄いシート/断熱&保温用）	
☐ 抗ヒスタミン剤配合副腎皮質ホルモン軟膏	

※応急処置・救命処置については、専門家と研修会を開催してください。

[目次に戻る](#)



31 緊急連絡シート作成の留意点を教えてください。



1 連絡手順の確立のポイント

(1) 学校・旅行会社の緊急連絡シートとのすり合わせ

協議会は、独自の緊急連絡シートを作成するだけでなく、学校や旅行会社の緊急連絡シートとのすり合わせが必要であることに留意してください。

事故が起きたときに、協議会・学校・旅行会社が、それぞれバラバラに連絡をしないようにするためです。

具体的には、独自の緊急連絡シートを作成のうえ、事前に、学校及び旅行会社と協議し、すり合わせを行い、必要に応じて学校や旅行会社の緊急連絡シートにリンクできるようにしておくことも検討に値します。

(2) 状況ごとに対応できるか

緊急連絡シートは、事故の内容、発生した場所、被害者の数、指導者側の数等によって手順（役割分担）も変わる可能性がありますので、①宿泊先の事故、②体験中の事故、③移動中の事故に分けて、緊急連絡シートが如何なる場合においても対応可能かを確認してください。

(3) 役割分担を明確にし、シミュレーション(模擬訓練)を繰り返すことが重要

誰がどう動くのか、誰がどこに連絡をするのかについては、具体的に協議会側であれば、メンバーの名前まで落とし込み、実際の動きをシミュレーション(模擬訓練)し続けてください。

緊急連絡シートは、一旦定形のものを利用して作成し、何度もシミュレーション(模擬訓練)をして修正し、実践仕様に高めてください。

2 緊急連絡シートの作成に当たっての優先順位（重大事故を想定）

【緊急連絡時のイメージ（リスク確認を含む）】

事例：前を走る子どもが乗る乗用車が細い道で脱輪し、横転し、車外に子どもが投げ出された。

【確認1】

- ①協議会のメンバー、指導者等が見ていない事故であればどうか。
- ②農林漁家がケガをして子どもと一緒に動けなくなっている場合はどうか。
- ③緊急連絡シートは誰が使うことを想定しているか。

【確認2】 前提として、次のリスク確認が日頃からできているか。

- ①“ここは交通事故が多くてね”と地元で言われている場所を知っているか。
- ②後部座席を含めシートベルトを必ず締めるよう指導できているか。
- ③事故現場に救急車が何分で駆け付けれるか（時間帯に応じて）、おおよそ確認はできているか。
- ④携帯電話が通じないエリアの確認ができているか。

[優先順位]

- ①事故等によって発生したケガ人や病人の応急処置・救助要請^(注1)（救急車等の手配）
→以後、一緒に病院に行くなど被害者側への対応が継続される。
（下記連絡後の保護者の病院等への駆け付けを含む）
→救急連絡により警察が来る^(注2)
- ↓
- ②（ほぼ同時進行）
- ・他の参加者の安全確保，点呼（1人不明と思っていたら2人不明のときもある）
 - ・二次災害等の防止（例えば後続車に轢かれる，救助中に崖から転落する，一緒に川に流され溺れる）→状況把握，現場を落ち着かせ，後の対応に備える
 - ・本部への連絡，指示（状況報告→組織としての対応を取り，連絡体制の確立を図る）
 - ・学校等への連絡
 - ・避難場所，人数，氏名，収容先病院，ケガの状況等の確認・連絡
- ↓
- ③警察，消防等への対応（責任者等への連絡含む）
- ④マスコミ対応（責任者等への連絡含む）
- ⑤実際に保険会社に連絡できる時間が取れるのはこの時点以降

（注1）ケガは救急車を呼ばなくとも，自分で病院に連れて行けば足りる場合もあります。

他方，医者に連れて行くべきときに「大丈夫だろう」と軽信し，連れて行かなかったため保護者とトラブルになったというケースが多くあります。

（注2）交通事故の場合，道路交通法72条1項により，車両等の運転者（運転者が死亡し，又は負傷したためやむを得ないときは，その他の乗務員。）は，警察官が現場にいるときは当該警察官に，警察官が現場にいないときは直ちに最寄りの警察署（派出所又は駐在所を含む。）の警察官に事故の報告をしなければならない。

※緊急連絡シートは緊急時対応マニュアルとほぼ同じであるため，分けて作成する必要はありません。

3 事故・トラブルのケース

緊急連絡シートの作成はとても難しいですが，あまり深く考えすぎて作成を止めないことが重要です。とにかく定形のものを参考にしてまず形を作ってください。そして，実際には，連絡手順の間違いでトラブルになるのではなく，「病院に連れて行くべきときに連れていけない」ということがトラブルの典型例ですから，そちらに意識の重点を置いてください（第4章第2節第2項「食物アレルギー」で紹介した判例も類似します。）。

小学校6年生の体育の時間に実施されたサッカーの試合中にボールが生徒の右眼にあたって1年以上経過後に失明した事故につき，担当教諭には事故当時保護者に対して速やかに事故を通報する義務があったのにその義務に違反したと認定された事案があります（しかし，因果関係を否定して，賠償請求は認められていない。東京高裁昭和58年12月12日，判例タイムズ515号181頁）。

[目次に戻る](#)



32 事故が起きた場合に、被害者や学校等に対して、どのような対応をすれば良いのでしょうか。



1 被害者との対応 ～重大事故を想定～

(1) 謝罪

基本的には、法的責任の如何にかかわらず、自らの主催事業で事故が起きた場合は、被害者側にしっかりと謝罪をすることが望ましい対応です（道義的責任）。

(2) 連絡・報告

被害者側には、事実関係を調査し、状況も含めて、連絡・報告をします。被害者側が拒まない限り、細やかな連絡・報告が望ましい対応です。

(3) 法的責任

保険で賠償金を支払うためには保険会社の調査が必要であり、保険会社の了解なく「保険金で賠償します」などと約束することはできません。

法的な責任の判断は、事実関係の精査が必要であり、事故が起きたからといって指導者・協議会側に法的責任が当然にあるわけではありません。

重大な事故については、警察の捜査等を待つことが必要なこともありますので、重大な事故についての法的責任については自分で判断することなく、専門家である弁護士に相談することが望ましい対応です。

2 学校との対応

事故が起きた場合に学校側がどのような法的責任を負うかはケースバイケースで判断されます。

学校との間では、どちらが被害者側の窓口になるか等の役割分担が自ずと出来上がります。

学校との関係でも、細やかな連絡・報告と緻密な連携が大切です。

3 その他

警察の捜査を受けるときは、事実関係を整理し、正しい事実を伝えてください。マスコミの取材に対しても同じです。分からないこと、曖昧なことがあれば、無理矢理答えを見付けるのではなく、「調査中です」「確認、検討した上でご報告いたします」等の対応が望ましい対応です。その際、態度、言葉遣いに気を付けることがとても大切です。

なお、保険会社との関係については、保険会社に連絡をすれば、所定の報告書をFAXで送ってきますので、保険会社の指示する手順通りに進めれば足ります。

[目次に戻る](#)

第7章 農林漁業体験プログラム開発のポイント



33 農林漁業体験プログラム開発のポイントを教えてください。



体験プログラム開発の基本的な考え方：

受け入れ側が提供する体験は、効率化や省力化、最先端の農業を体験させるものではありません。強い動力で動く道具類、エンジンやモーターが動力となる機械類、農業機具類、チェーンソーや草刈機などは重大な事故が発生しています。

農業機械の講習や機器・機械の使い方を覚えることが目的ではありません。

農業機械を使っの体験は、子ども向けの体験プログラムとしては不適切です。

事故の大半は無理、無知、無謀がもたらしています。

子どもやお客様は、受け入れ側が提供する農業体験の危険に対して無知です。

提供しようとする体験において、「もしも」、「まさか」、を考え、リスクの軽減、回避、転嫁を図ったプログラムの開発に徹してください。

※農作業事故の参考資料：一般社団法人日本農村医学界発行「こうして起こった農作業事故」

http://www.maff.go.jp/j/seisan/sien/sizai/s_kikaika/anzen/pdf/04-001.pdf



前提：体験プログラムの開発は、上記の考え方を踏まえ、送り手（客側）、受け手（受け入れ側）を把握することから始まり、開発ポイントはそれぞれ異なります。共通ポイントと事例解説により、考察してください。

- ・送り手：客側（希望する体験、客層、性別・年齢、人数構成、形態、交通手段など）。
- ・受け手：受け入れ側の状況（体験料金、体験内容、時期・時間、指導者、体制、天候、面積、使用する道具、場所、収穫後の配分、採算、後片付け、食事・おやつ、宿泊、提供するサービスなど）の状況。

農業体験プログラム開発の共通ポイント

- ①体験プログラムごとに、プランニングシートを作り、リスクの想定をした上で、リスクの軽減、回避、転嫁、対策を考えてください。
- ②受け入れ前に模擬訓練をして、①を再確認してください。
- ③開発済みの体験プログラム（定番化している体験）は毎年見直してください。

農業体験別プログラム開発の事例

資料編に体験プログラム開発に使用するプランニングシートを用意しています。以下の4事例は完璧ではありませんが概ねリスクマネジメントを考察できるように配慮したプランニングシートを作成しています。考察の参考にしてください。

例1. 田植え体験とおにぎらず昼食作り体験

例2. 稲刈り体験と農家の手作り弁当提供

例3. 野菜植え付け（サツマイモ）体験

例4. 野菜収穫（ジャガイモ）、収穫した野菜を使った料理体験（カレー）とご飯炊き

農業体験プログラム開発の共通ポイント詳細解説

ポイント① ⇒ まず、机上で考える。

体験プログラムごとに、プランニングシートを作り、リスクの想定をした上で軽減、回避、転嫁、対策を考えてください。

手順は、プランニングシートの項目を埋めていく段階で、幾多の気づきや様々な課題が発生してきます。

それらの気づきや課題に対して天候リスクや自然災害リスクも踏まえ、「もしも」、「まさか」を考え、リスクの軽減、回避、転嫁、対策を図ったものにしてください。

この一連の作業で、体験プログラムの安全性を踏まえた完成度が高まります。

ポイント② ⇒ 次に、現場で検証する

受け入れ前に模擬訓練をして、①を再確認してください。

プランニングシートを作成したら、実際に現場で模擬訓練をして、①のリスク想定以外の懸念事項やヒヤリ・ハット、気がかり事項が発生する可能性があります。

これらの対策を事前にしておくことで、さらに完成度が高まり、安全性が確保されます。

面倒がらずに、是非実行してください。

ポイント③ ⇒ 何度も、見直す

開発済みの体験プログラム（定番化している体験）は毎年見直してください。

一度開発した体験プログラムは、今回はうまく行ったとしても、お客様側（受入れ客層、受入れ人数など）は毎回異なります。

また、受け入れ側の体制や担当する体験指導者、応援スタッフ、体験場所なども毎回変更になります。

さらには農林漁家のおとうさん、おかあさんも毎年加齢による体力の衰えや失念によるリスクも発生します。

必ず、受入れごとに関係者一同が集まり、受入れ勉強会を実施し、ヒヤリハットを考えた対策を施し、ブラッシュアップをしてリスクマネジメントをしてください。

受入れプランニングシート（体験プログラムリスクマネジメント整理用）

受入れ仮定:		立案者
項目		
体験プログラム名		
目的		
体験指導者の役割・意識		
前日、当日朝の準備・点検		
体験指導者受入れスタイル		
所要時間とプログラム組み立て		
事務局の役割		
必要な道具類		
使用する場所・確認事項		
救急搬送先		
危険要因 リスクの 洗い出し	顕在リスク	
	潜在リスク	
	外的要因	
	人的要因	
実地踏査、模擬訓練時のヒヤリ・ハット、 気がかり項目		
参加者持参品・服装		

田植え体験とおにぎらず昼食作り体験プランニングシート

受入れ仮定:6月実施。仮称スイーツ小学校6年生1クラス36名＋女性教師1名＋運転手1名。男17名女19名、日帰り体験。昼食体験提供。10時～14時。滞在4時間。大型バス1台。体験料金@ ¥3,000。直接予約(旅行社経由無し)		立案者	東葉青空
項目		内容	
体験プログラム名		1.田植え体験とおにぎらずの昼食 雨の日代替プログラム:公民館で葉っぱ絵画体験	
目的		米作りの初期段階の体験を通じて食への興味、米からご飯への過程、農の理解を感じてもらう	
体験指導者の役割		田植え体験:着替え会場から田んぼへの経路確認と安全確保 手植えの道具段取り 手植えの手本を示す 安全管理 見張り 点呼 おにぎらずの昼食作り体験:ご飯と味噌汁は事前に準備する 1班に1本のラップ。鯉節 昆布 うめぼし 海苔 お漬物 塩 胡麻 卵焼きなど具材の用意 テーブル タオル お手拭 手洗い 衛生管理 食材の保存状態 前日仕込み	
前日、当日朝の準備・点検		前日:天気予報 河川上流域の水量 体験提供用田んぼ周辺の实地踏査 弁当づくり会場の衛生点検 火の元点検 朝:現場の見回り 用水路の水量調整 役割分担確認	
体験指導者 受入れスタイル		生徒6名を1班とし6班編成 全体で8名 田植え体験:6名(男性4名 女性2名)昼食体験8名(男性4名 女性4名) 女性2名が昼食の事前準備	
所要時間とプログラム組み立て		田植え2時間(実質田んぼ内には30分) 昼食作り1時間30分(後片付けを含む) 10時20分:着替えて集合 オリエンテーション 準備運動 点呼 田んぼへ移動 10時30分:田んぼで注意を与える 植え方と危険を教える 役割分担 10時45分～11時15分:田植え体験 11時20分:田植え終了 点呼 11時30分:洗面所へ移動し手足洗済 公民館へ移動 点呼 11時50分:昼食作り体験～12時30分～昼食13時ごろまで 後片付け終了13時30分 指導者とのふれあい時間 14時終了	
役割分担 (事務局が介在しない場合)		昼食準備 着替え 洗面所の点検 水分補給及び女生徒の健康管理担当は女性指導者 田植え体験の道具や朝の实地踏査 後片付け 見張り 苗の用意 点呼 ファーストエイドは男性指導者担当	
必要な道具類		田植えの植え付け場所を示す目印ライン機 苗	
使用する場所・確認事項		10アール(約1反) できるだけ平坦な場所で道路から遠い安全な場所を確保 棚田の場合は班分けをして交替で使用する 携帯電波確認	
救急搬送先		○△□救急医療センター 大田中外科医携帯0123-345-7890	
危険要因 リスクの 洗い出し	顕在リスク	田んぼに入り込んでいるピン片 集合場所からの経路の農業機械 農業車両との接触 周辺の用水路 田んぼの横を通る車	
	潜在リスク	あぜ道 棚田の石垣 植え付け用目印ラインの破損 公民館の調理用テーブル 棚田の落差	
	外的要因	天候急変 気温 水温変化 スズメバチ ヘビ ヒル 熱中症 アレルギー	
	人的要因	田植え:転倒 田んぼ内に裸足ではいることの危険 指導者の持病 昼食:味噌汁でのやけど 食中毒 ふざけていての事故	
实地踏査 模擬訓練時のヒヤリ・ハット 気がかり項目		田植え繁忙期の農業機械の往来 田んぼまでの経路 裸足で田んぼへ入れることの安全性疑問 田んぼから足洗い場までの経路 水量が大きく変化する周辺の用水路 昼食作りのテーブル足のふらつき老朽化	
参加者持参品・服装		長袖 長ズボン 紫外線除けの帽子 タオル2枚 水筒 ティッシュペーパー	

稲刈り体験と農家の手作り弁当提供プランニングシート

受入れ仮定:10月実施。仮称:丸丸中学校2年生2クラス64名＋教師3名＋運転手2名。男37名女27名、日帰り体験。昼食弁当提供。10時40分～15時40分。滞在5時間。大型バス2台。体験料金@ ¥3,500。旅行社からの予約。		立案者	南羽良処
項目	内容		
体験プログラム名	稲刈り体験と農家の手作り弁当提供 雨の日代替プログラム:一升瓶で粳からお米を作り 洗米・炊飯		
目的	地元産のお米を通じて郷土愛を育むこと お米収穫の実体験からの食育		
体験指導者の注意・共有事項	稲刈り:子どもの行動特徴や注意の与え方の勉強会を開き事故を未然に防ぐための安全配慮を全員が共有する 女子生徒の生理現象の配慮 手作り弁当:衛生管理・アレルギーの事前把握		
前日、当日の朝の準備・点検	前日、現場近くに給水所兼休憩用テント張り 当日朝、体験現場周辺の実地踏査 指導者の健康チェック 経路、駐車場の安全確認 はざ掛け用の三脚と竹ざお アレルギーの把握と対策		
道具管理・使い方	稲刈り鎌の使い方は班ごとに現場で教える はざ掛け用竹、三脚		
体験指導者 受入れスタイル	教師も含め1班7名～8名 10班編成 体験指導者6世帯12名 事務局1名 班ごとに農家1世帯夫婦が担当 農家の手作り弁当:おかずは各農家が献立を分散して担当 当日朝10時までに昼食場所の公民館へ運び、女性6名おかずを平等に詰め合わせる お汁のけんちん汁は大鍋でご飯は電気釜を各家庭持ち寄り6個で炊飯 紙製の器でお代わり自由で提供 昼食を準備する間に男性指導者は棚田散策や里山案内 昼食は班毎に分散し各世帯で会話を楽しみながら行う		
所要時間とプログラム 組み立て	5時間(稲刈りは休憩を交えて40分程度) 10時40分:入村式 自己紹介・班分け説明 スケジュール トイレ場所紹介 11時00分:1班から棚田散策 里山の紹介 川や山など郷土について説明 11時30分～13時15分:着替えて昼食 昼食時に農家手作りおかずの紹介 昼食後、お米の成長・育成の手間 稲刈りのオリエンテーション 13時30分:現場移動 注意喚起説明 稲刈り体験(休憩を交えて40分) 14時20～40分:後片付け 14時45分:離村式		
事務局の役割	スケジュール 旅行会社対応 6世帯の役割表を作成し班の割り当を決める 食材・道具手配 給水タンク設置 経口補水液 トイレトペーパー 清掃 弁当のアレルギー対応 調理用手袋 除菌洗剤 リスクマネジメント講習会の実施		
必要な道具類	稲刈り鎌80本 軍手 靴が入るビニール袋200枚 輪ゴム1箱 ハンドマイク		
使用する場所	稲刈りは棚田の2面を利用 雨の日代替プログラムは公民館とJA研修所に分散		
救急搬送先	○△□救急医療センター 大田中外科医携帯0123-345-7890		
危険要因 リスクの 洗い出し	外的要因	がけ崩れ 天候急変 落雷 熊 へび いのしし 鹿 スズメバチ 電気柵 突風によるテント破壊	
	人的要因	切り株に躓いての転倒 鎌で自分の指を切る はざ賭けでゴミが目に入る ふざけていてぬかるんでいた田んぼで捻挫 慣れない作業	
	顕在リスク	狭いあぜ道 棚田に入り込んでいるビン片 棚田の高低差 集合場所からの経路 の農業機械農業車両の往来 電気柵 鎌の刃 稲穂	
	潜在リスク	熱いお汁でやけど	
実地踏査 模擬訓練 時のヒヤリ・ハット 気がかり項目	鎌を持って振り返った際に後ろの人に気付かず刃傷を負わせた 稲穂が目刺さり手に持っていた鎌で目をこすった 突風でテントが壊れた 棚田から飛び降りて捻挫した		
参加者持参品・服装	長袖・長ズボン 帽子 タオル2枚 水筒 ティッシュペーパー		

野菜植え付け(サツマイモ)体験プランニングシート

受入れ仮定:5月実施。仮称:英才岳中学2年生修学旅行、2クラス55名。男28名女27名、3時間体験。おやつ提供有。13時～16時。宿泊先から体験場へ民宿が送迎。体験料金@ ¥2,000。 旅行社からの予約。		立案者	北寒太郎
項目		内容	
体験プログラム名		野菜植え付け(サツマイモ)植え付け体験 雨の日:小雨決行 大雨・雷雨は中止。代替プログラム:公民館で木の実や枝で工作体験	
目的		野菜を育てて食としていただくための手順を説明し食物に感謝の理解を深める 食育 農業がもつ循環のメカニズム理解	
体験指導者の役割		サツマイモ体験:子どもの行動特徴や注意の与え方の勉強会を開き事故を未然に防ぐための安全配慮を全員が共有する サツマイモの生育過程をパネルで作紙芝居にして説明する 収穫時期への誘いもする 女子生徒の生理現象の配慮 手作り弁当の衛生管理・アレルギーの事前把握 おやつ:農産物の加工品(米粉団子)	
前日、当日朝の準備・点検		前日:大きい畝7本作る 危険箇所 畑周辺の蜂の巣点検 天気予報確認 当日朝:電気柵の電源落とす 実地踏査・周辺見回り 道具点検と数量確認	
体験指導者 受入れスタイル		クラス単位1班7名で班編成 体験指導者10名で対応 体験担当8名 おやつ担当と全体管理担当2名	
所要時間とプログラム 組み立て		13時:00分:直売所に集合 13時10分:入村式。自己紹介と班編成 生徒側も班長を決める 13:20分:体験の畑へ徒歩移動 先頭と最後尾は体験指導者 交通安全配慮 13時30分:体験現場到着 班ごとにオリエンテーション 軍手配布 13時45分:畝にマルチを張る 穴あけ道具で1畝70個の穴をあける 14時10分:芋苗を配り一人10本を植えさせ土を被せる 14時40分:水をジョウロでかけ芋の植え付け終了 後片付け 手洗い トイレ 15:20分～50分:畑の側でおやつタイム 15時55分離村式 直売所に戻る	
事務局の役割		旅行会社との交渉 宿泊民宿との連携調整 リスクマネジメント講座の実施	
必要な道具類		マルチ 軍手70 穴あけ器7個 園芸用スコップ ブルーシート7枚 芋苗 おやつ、除菌お絞り 手洗い場の薬用石鹸	
使用する場所・確認事項		畑10アール(約1反) 耕転機・畝起こし機械は体験現場から撤去 苗は束で準備前日の天気予報次第でPM2. 5対策マスク 紫外線対策帽子を持参させる	
救急搬送先		○△□救急医療センター 大田中外科医携帯0123-345-7890	
危険要因 リスクの 洗い出し	顕在リスク	畑のがけ崩れ 天候急変 落雷 熊へび いのしし 鹿 スズメバチ 電気柵 突風によりビニールシートが飛ぶ	
	潜在リスク	畝を飛び越える際の転倒	
	外的要因	直売所駐車場ででの交通事故 直売所からの経路の農業機械 農業車両の往来 電気柵 園芸用スコップ 穴あけ用器具の取扱い	
	人的要因	単純作業による協調性	
実地踏査 模擬訓練 時のヒヤリ・ハット 気がかり項目		移植用スコップによるふざけ マルチ穴あけ用器でのケガ 畑でのふざけによるケガ 周囲の道路に飛び出での交通事故 苗を切るはさみでのケガ スマホによるよそ見転倒	
参加者持参品・服装		長袖 長ズボン 紫外線よけの帽子 タオル	

ジャガイモ収穫体験＋チキンカレー作り＋ご飯炊き ＋デザート作り体験プランニングシート

受入れ仮定:10月実施。仮称:都会の女子大学ゼミ24名＋男性教師1名、JR利用越生駅の送迎あり。女24名、日帰り体験。カレー作り昼食体験。10時30分到着～16時00分散。滞在4. 5時間。体験料金@ ¥4,000。ジャガイモ1kgみやげ付き、旅行社からの予約。ビニールレインコート持参。		立案者	西風吹太
項目	内容		
体験プログラム名	ジャガイモ収穫体験＋チキンカレー作り体験＋ご飯炊き 雨の日代替プログラム:小雨決行 大雨・雷雨中止 代替プログラム:鶏の餌やりとマイ箸作り体験		
目的	食育 次世代の消費者育成		
体験指導者の役割・意識	収穫する作物が食材となること 自分たちの食事になることを教える 大学生なので自主性を尊重するが農業体験や調理体験は初心者もいる可能性が高いので初心者レベルで体験指導する 汚れ 汗 紫外線 トイレ休憩など女性への配慮		
前日、当日朝の準備・点検	前日:天気予報 畑と周辺の見回り 獣害点検 プロパンガスと携帯コンロの確認 道具の確認 当日朝:畑の実地踏査 電気柵の電源落とし		
体験指導者受入れスタイル	事務局からの手配 1班6名の4班編成 体験指導者7名 収穫体験指導は5名 2名は調理体験の食器やデザートやサラダレシピと食材の事前段取り担当 調理は7名一緒に進める		
所要時間とプログラム組み立て	10時00分:JR駅までマイクロバスとマイカーで出迎え 10時30分:入村式 自己紹介 オリエンテーション 着替え トイレ 10時50分:畑へ移動 ジャガイモ堀りの注意 収穫物を入れるコンテナを配る 11時00分:ジャガイモ収穫～11時30分 コンテナへ移しこみ作業 JA加工場へ移動 11時50分:ジャガイモ洗いと皮むき 材料の切り分け作業 12時20分:ルーからカレーを作る 炊飯をする 野菜サラダを作る デザートのプリンを作る 13時20分:完成 食事 ～14時20分 14時50分後片付け終了 15時00分JA直売所に移動 野菜や食品の紹介 ショッピング 15時30分終了 体験指導者との語らい 15時:50分 16時00分離村式 JR駅まで送り 見送り解散		
事務局の役割	スケジュール 旅行社との調整 駅送迎のバスとマイカー手配 傷害保険 損害保険 付保の確認 リスクマネジメント講習		
必要な道具類	10人分程度の雨具 軍手 たわし 包丁 鍋 洗いボール まな板 除菌剤 チキンたまねぎ カレーパウダー 小麦粉 チキンスープの素、塩コショウ、香辛料 タオル テーブル用ふきん 食器用洗剤 卵 サラダ油 おたま 食器など		
使用する場所・確認事項	ジャガイモ収穫は80苗分を確保 ロープで目印を作っておく カレー作り体験:JA加工場を利用 サラダ野菜や卵は直売所からの調達		
救急搬送先	○△□救急医療センター 中田中外科医携帯0123-345-7890		
危険要因 リスクの洗い出し	顕在リスク	畑のがけ崩れ 天候急変 落雷 熊 へび アレルギー 猪 鹿 スズメバチ 電気柵	
	潜在リスク	携帯用コンロの爆発	
	外的要因	天候急変 スズメバチ へび アレルギージャガイモ皮むき 調理の際の包丁・ピーラーでのケガ やけど	
	人的要因	調理未体験による事故	
実地踏査 模擬訓練時のヒヤリ・ハット 気がかり項目	収穫ジャガイモをコンテナに詰めすぎて持ち運ぶ際のぎっくり腰 ピーラー 包丁を持って振り向いた際のヒヤリ 鍋が大きすぎて携帯コンロボンベが加熱した スマホに夢中になり注意力散漫 お玉の柄が燃えた		
参加者持参品・服装	長袖 長ズボン タオル2枚 水筒 帽子 ジャガイモ持ち帰り用ビニール袋		

体験の内容と体験させるために必要な面積・数量・時間の目安

体験作物	体験内容	面積・数・時間の目安
リンゴ	受粉、摘蕾・摘果、収穫・選果	1本に5名～7名程度、30名の場合は約6～8本 収穫:1名が5～10個程度
ぶどう	摘粒・摘房、袋かけ、収穫	1本で3名～5名程度、30名の場合は約8～10本 収穫:1名が3～5房程度
梨	人工授粉、袋かけ、収穫、選果	1本で4名～6名程度、30名の場合は約6～8本 収穫:1名が2～3個程度
ブルーベリー	剪定、収穫、選果、容器詰め	1本で2～3名程度、30名の場合は約15～20本 収穫:1名100g～200グラム程度
コメ作り	田植え、稲刈り	田植え:1人約10株～20株程度、30名の必要面積は約200㎡～300㎡ 稲刈り:1人5株～10株程度で30名の必要面積は約100～150㎡
野菜 (葉物・豆)	畝立、種まき、収穫 (キャベツ、レタス、大豆、小豆)	キャベツ・レタス:畝立、種まきは1名2m程度で、30名の必要な畝の長さ約60m 収穫:1人3～4玉、30名の場合は約100玉程度 大豆、小豆、ピーナツ:畝立、種まきは1名2m程度で30名の場合は約60m 収穫:1人3～4株、30名の場合は100株程度
野菜 (根物)	畝立、種・苗植え、収穫 (ジャガイモ、サツマイモ、里イモ)	畝立、種・苗植え:1名で3～4個(蔓)1mで30名の場合は30～40m 収穫:1人2～4蔓分、30名の場合の畝の長さは約30m
シイタケ	菌打ち・菌植え・収穫	菌打ち・菌植え:1名に原木1～2本程度、30名の場合は、原木約30～40本 収穫:1名5個～10個、30名の場合は原木約50本で、個数にして150～200個程度
林業	間伐・枝打ち	インストラクター1名に児童5名で班を編成。作業は安全に配慮して、説明30分、作業1時間、後片づけ1時間程度。面積約300㎡～900㎡(伐採する場合はさらに広くとる)
漁業	釣り・魚さばき・干物づくり	波戸(岸壁)釣り:インストラクター1名に3組まで(児童は2名1組でチームを組み竿1組1本) 魚さばき・干物作り:インストラクター1名に児童5名で班を編成。包丁は、手を携えて1名ずつ指導。あじは1名に2尾、イカは1名1匹程度。名札を付けさせて自分の分を識別する工夫が必要。

[目次に戻る](#)